

11月18・19日、畜草研（那須）において、「飼料用トウモロコシの復権のために」をテーマに標記研究会が開催された。トウモロコシは栄養収量が高い飼料作物である。しかし、自給飼料の栽培面積は飼養牛の多頭化とともに減少し、トウモロコシについても平成2年に約13万aであった栽培面積が平成14年には9万haへと大幅に減少した。このような状況下で、トウモロコシ用の細断型ロールペーラの開発や優れた新品種の開発などが取り組まれている。約160名の出席を得て、これら新技術開発の現状確認と、トウモロコシ栽培拡大のための課題について論議された。

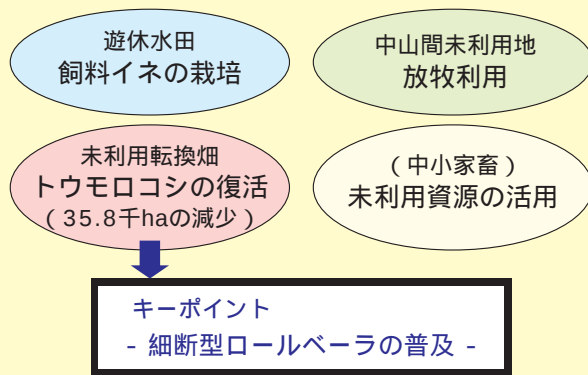
当研究所の館野飼料生産管理部長は、大規模経営にはコントラクター用の汎用型自走式ロールペーラの開発、中規模経営には細断型ロールペールの活用と省力型二毛作栽培体系の確立、付加価値追求型小規模経営には細断型ロールペールの活用と無農薬・無化学肥料栽培体系の開発が重要であると総括的な解題を行った。

生研センターの志藤主任研究官から、細断型ロールペール体系の現状解説がなされ、今後はコントラクターや大規模経営向けに自走式細断型ロールペールの開発を目指すとし、群馬県畜試の新井主任研究員からは、農家での細断型ロールペール

体系の実証試験結果に基づき、収穫から給与の各工程で一部ばらつきがあるものの概ね良い評価を得たとしている。北農研の濃沼室長は、最近のトウモロコシ新品種は輸入品種に負けない性能があり、農家への広報が重要と述べた。北海道立畜試の谷川研究員は、トウモロコシサイレージの破碎処理が乳牛の養分利用性や乳生産に影響を与えるとし、繊維性や採食性を損なわずにトウモロコシデンプンの利用性を高める新技術を紹介した。

総合討論では、ネットとフィルムのコストの問題、汎用型自走式ロールペーラの開発と作業性の

飼料自給率向上への推進方策



群馬県における細断型ロールペーラの位置づけ

■ 所内トピック

改善、TMRセンターでの利用法の改善が指摘された。

2日目は畜草研梶川主研による「タンパク質の評価についての最新情報」、肥飼料検査所平岡主任検査官による「マイコトキシンの汚染実態」、畜草研蔡室長による「サイレージ用新規乳酸菌と発酵品質評価法」、畜草研寺田研究交流調整官より「消化試験実施要領の再確認」の4つの飼料評価・栄養に関する最新知見の紹介があった。

（飼料資源研究官 落合一彦）



研究会2日目：新技術開発の検証